

編集後記

『南アジア研究』第 25 号をお届けする。本誌では第 24 号から特集を企画するようになった。第 25 号の巻頭特集では、日本南アジア学会第 25 回全国大会プログラムの一環として企画されたテーマ別セッションⅡ「ベンガル研究における文学的構想力と歴史的構想力の交差に向けて」の報告者の方々に執筆をお願いした。ベンガルという南アジアの一地域を共通の認識の場とし、文学と歴史学という異なる分野から多面的にアプローチすることによって、ベンガルという地域に対する認識を深め、新たなベンガル像へと可能性を開いただけでなく、共同研究の有用性を再確認させられる特集になったと考えている。

一方、今回は個別論文の投稿数が非常に少なく、掲載数も論文 1 本、研究ノート 2 本にとどまった。2010 年より、人間文化研究機構の地域研究推進事業として「現代インド地域研究」が進行中であり、日本南アジア学会会員の多くが参加している。この事業でも、学術フォーラム誌『現代インド研究』を刊行することになり、現状では同じ分野の学術雑誌が 2 種類になったわけである。さらに英文雑誌を加えると合計 3 誌となり、論文発表の媒体は飛躍的に増加した。また、21 世紀に入ってから、インドの経済成長がますます注目を集めるようになり、これに伴って、南アジア研究に対するニーズも高まりつつあるといえよう。ところが、南アジア研究者の数自体はそれほど増えているわけではない。本学会会員数も長らく 500 ～ 550 名程度で推移している。必然的に論文等も 3 誌で分け合うことになるため、投稿数が減少したと考えられるだろう。

学術誌の質と量の維持には、学会員の活発な議論と積極的な論文投稿が不可欠である。本誌は日本南アジア学会の活動の核であるばかりでなく、日本における南アジア研究においても中心的な存在である。編集委員会は、今後も南アジア研究の発展に資する特集企画を打ち出していくつもりであるが、同時に、会員の皆さんの積極的な投稿と協力を切に願うものである。

第 25 号編集長 井上貴子

いのうえ たかこ ●大東文化大学国際関係学部教授

『南アジア研究』第 25 号編集委員会

伊藤 融、井上貴子（編集長）、岩谷彩子、木曾順子、佐藤隆広、
志賀美和子、馬場紀寿、三輪博樹